

II-3 遠隔と近接

ヴォルフガング ミヒエル

九州の蘭学の独自性や他の地域との違いを探そうとすると、まず最初に目をひくのが位置という条件である。九州は江戸からは遠いが、オランダ商館があったという点でヨーロッパには近いと言える。また、鎖国時代のいわゆる四つの口のうち三つは九州にあった。外国人と接触し、ものや情報を直接交換することは、九州を舞台に行なわれていたのである。

一六四一年から、佐賀藩と福岡藩が幕府の直轄地長崎の警備を担当することになった。また一六〇九年から一六四〇年にかけて英国とオランダの商館があった平戸藩も、ヨーロッパへの関心を失うことはなかった。距離的に近い陸路と海路を伝わり、ものや情報はまたたく間に九州全体に広まった。オランダ商館長と奉行所の役人が長崎街道を通過して長崎から小倉へと向かい、さらに江戸

へと旅していった。朝鮮通信使も九州北部經由で江戸へ赴いた。九州の多くの地域で十七世紀初頭まで海外貿易が行なわれており、そのために多くの人々の目が外に向けられていた。薩摩藩主・島津重豪、その次男で中津藩の養子となった奥平昌高や松浦家の歴代の藩主のようないわゆる蘭癖大名にとつて、九州で夢を追い求めることはより容易だったに違いない。そればかりか幕府が派遣した長崎奉行たちでさえ、職務上の使命を超える程に、異国の文化や学問に興味を示した場合があった。

西日本近海の密貿易は相当な規模だったようだが、ヨーロッパとの交流上、長崎はもつとも重要な舞台であった。出島はオランダ東インド会社が征服した地に置いた拠点ではなく、契約によって譲渡された領地でもなく、賃貸の隔離居留地であった。

やがて長崎には出島蘭館の維持管理、監視、貿易に携わり、その地位によって様々な特権を得た人々の社会体制が形成された。翻訳を独占する阿蘭陀通事の一部は、ヨーロッパ人との交流を蘭学者としても活用した。西、檜林、本木、今村、吉雄などの通事の家系は医学史の書

物以外にも見られる。彼らはオランダ船が運んでくる珍品を最初に目にする人々であった。すでに十七世紀の送り状には眼鏡、顕微鏡、望遠鏡、地球儀、医薬品、様々な器具など、十八世紀の蘭学者も愛用したもののほとんどが見られる。奉行や江戸からの要請に応えて、阿蘭陀通事はこれらのものについてヨーロッパ人の説明をまとめた。新しい用語の多くはこの過程で生み出された。もちろん彼らはあらゆる報告書から個人用の写本も作成し、それらはのちに知人、弟子などによって書き写された。

このような人々の間では幕府による取り締まりは、ほとんど感じられない。個人取引は幕府によっても東インド会社によっても常時非常に厳しく禁じられていたが、それには何の成果もなかった。吉宗によつて洋書の輸入禁止が解かれるずっと以前から、数々の書籍が長崎へ入つて来ていたのである。

長崎は遊学先としても大変重要であった。地の利を生かして九州出身者が多く訪れた。コネがあれば、出島蘭館の外科医を訪ねることもできた。紅毛の外科医からの

免許状の所持者のほとんどが九州出身者であるのは偶然ではない。しかし通事からも資料や情報を手に入れることができる。多くの蘭方医や蘭学者にとつて長崎遊学は重要な経歴であった。全国から集まった新しい智を求め人々が互いに刺激し合うことが、蘭学の発達と普及を促進したことも見過ごしてはならない。

また長崎は、彼らがアジア、特に中国の重要性を再認識できる場所でもある。南京、廈門、広東等々からのジャンク船が医薬品や漢籍など様々な品を降ろしていた。日本は中国との対話の中で自らの学問を築いてきたのである。そして十七世紀以降、ヨーロッパがオランダ東インド会社を通じてこの対話に加わることになった。したがって江戸時代になつてからも中国の役割を抜きにして蘭学の発展を十分に理解することはできないのである。

(九州大学大学院言語文化研究院)